

### ヨーロッパ政治思想史概観

政治史上重要な文書・事件

主な思想と思想家たちの年代的な位置（不完全な表である）

1:

↑ Magna Carta 英1215年

2: の

↑ Petition of Right 英1628年  
Rights ではない

3: 革命

1642～1649年

ウェストファリア条約1648年  
クロムウェル独裁  
王政復古 1660年

4: 革命

1688～1689年

5: の

Bill of Rights 英1689年

アメリカ独立革命

1776～1783年

【12】の影響も！

6: 宣言

1776年7月4日

7: 憲法

1787年

フランス革命勃発 1789年

8:

1789年8月26日

17～18世紀のヨーロッパでは、伝統や信仰が相対化され、**進歩の観念**が生まれた。

国王の権力＝国家主権  
○ボダン Bodin 仏1530-96

#### 自然法思想

【9: 】※1＝「国際法の祖」・  
「近代自然法の父」 Grotius 蘭 1583-1645

対立

【10: 】※3  
○ボーダン Bodin 仏 1530-96  
○ボシュエ Bossuet 仏 1627-1704

社会契約説は自然法思想に基礎をおいている。

#### 社会契約説

【11: 】Hobbes 英 1588-1679  
『リヴァイアサン』1651  
「万人の万人に対する闘争」  
**王の専制は当然** ※2

結論は正反対

**王権は制限せらるべきもの**  
【12: 】Locke 英 1632-1704  
『統治論二篇』（市民政府二論）1690  
名誉革命を正当化

【13: 】Rousseau 仏 1712-78  
『人間不平等起源論』1755  
『社会契約論』1762

○ジェファソン Jefferson 米1743-1826  
【6】の起草者

○ラ＝ファイエット La Fayette 仏 1757-1834  
【8】の起草者の一人

ここに掲げた偉大な啓蒙思想家でフランス革命の時に生存していた人は1人もいない。

人間の「理性の光」に照らして事物を検討し、迷信や偏見を打破すべきであるとする思想はルネサンス期から見られたが、科学革命を経て、更に徹底したものが啓蒙思想である。 ※7

#### 啓蒙思想

狭い意味での啓蒙思想

【14: 派】  
○ディドロ ※4  
Diderot 仏 1713-84  
○ダランヴェール  
d'Alambert 仏 1717-83  
重農主義と同じく、重商主義を批判  
自由放任を主張。

○【15: 】  
Montesquieu 仏 1689-1775 ※5  
『法の精神』1748 **三権分立**

○【16: 】  
Voltaire 仏 1694-1778  
『哲学書簡』1734、『寛容論』  
↑啓蒙運動の引き金となった！  
フリードリヒ2世に直接助言  
エカチェリーナ2世に助言（文通）  
（啓蒙専制君主 ※6）

※1 【9】の主著は『海洋自由論』（1609年）、『戦争と平和の法（De jure belli ac pacis）』（1625年）《頻出》

※2 ホブズは「自然状態」を「万人の万人に対する闘争」と捉え、王政復古（1660）を擁護した。ホブズの主著は『リヴァイアサン』だが、他に『市民論』11Wも著している。

※3 ボシュエはルイ14世の宮廷説教師 11W で、ルイ14世に多大の影響を与えた。著書は『哲学入門』・『世界史叙説』・『棺前説教集』。その約半世紀前のボーダンはユグノー戦争（1562-98年）の時期に著した『国家論』（1576年）で初めて近代的な主権論を説いて中央集権国家を理論づけたが、その主張は王権神授説を含む。彼は、国家は宗教に寛容であるべきと説く一方で、狂信的に魔女狩りを推奨、自らも異端審問で多くの無実の人間を殺し、1580年刊行の著書、『悪魔憑き（デモノマニア）』（1580）は長く魔女狩りのバイブルとして用いられた。

※4 デイドロは『百科全書』編集の中心人物。無神論者、唯物論者。『百科全書』の記事の中心は当時の最先端の科学思想・技術だが、それらにまじえて社会・宗教・哲学等の批判を行ったため、その刊行自体が宗教界や特権階級から危険視され、たびたびの出版弾圧を受けたが、1751年～1772年の間に完結させた。『百科全書』はフランス革命（1789-1799年）を思想的に準備したともいわれる。ロシアの女帝エカチェリーナ2世との個人的交流も史実である。

※5 モンテスキューの主著は『法の精神』（1748）だが、『ペルシア人の手紙』という書簡体小説も書いている。パリを訪れたペルシア人が故郷ととり交わした手紙という形で、ルイ14世時代の風俗と政治とを批判。ハレムの夢と架空の法則とを織

りまぜて当時の歪んだフランス社会を大胆に諷刺したもので当時のベストセラー。

- ※6 主な啓蒙専制君主はフリードリヒ2世（プロイセン位1740-86）、マリア=テレジア（オーストリア位1740-80）・ヨーゼフ2世（マリア=テレジアの長男位1765-90）・エカチェリーナ2世（ロシア位1762-96）。啓蒙専制主義とは、啓蒙思想が絶対王政と結びついたものである。
- ※7 『空想から科学への社会主義の発展』（1880年、エンゲルス著）の中で、著者は啓蒙思想の本質を次のように述べている。  
「フランスで来るべき革命のために思想上の準備をした偉大な人物たちは、彼ら自身がきわめて革命的に行動した。どんな種類のもので、外的な権威というものを彼らは認めなかった。宗教に、自然観に、社会に、国家制度に、すべてにすこしも容赦なく批判がくわえられた。一切のものが、理性の審判廷にたつて、自分が存在してもよいわけを弁明するか、それができなければ存在することを断念しなければならない、と彼らは考えた。悟性的思考が、なんでもはかれる尺度として、一切のものにあてがわれた。それは、ヘーゲルが言っているように、世界を逆立ちさせた〔世界の上に思想をではなく、思想の上に世界をおいた〕時代であった。」（寺沢恒信訳 1966年大月書店 国民文庫）

## 経済学学説史

啓蒙思想は、経済学の分野にも適用された。

- 1) 近世は絶対王政時代であり、【17:                   】政策の時代である。  
第一段階 重金主義 / 第二段階 貿易差額主義 / 第三段階 産業保護主義                    No.108参照  
このような重商主義を批判する経済学が以下の2)、3)である。
- 2) 18世紀になると、【18:                   】（フィジオクラシー）が登場する。富の源泉は農産物。農業を盛んにすべきであると説き、関税政策などで国家が経済に干渉することに反対し、穀物取引などの自由を主張した。この「【19:                   】」（なすにまかせよ）の精神はアダム=スミスに受け継がれた。自由放任とは、誰でも自由に市場競争に参加させるべきだという趣旨。
  - ケネー Quesnay 仏 1694-1774 ……自然法思想に基づいて国家の経済活動への干渉を批判。著書『【20:                   】』  
ケネーが重農主義を唱えるにあたって中国にも同様の考え方が存在している事をイェズ会の宣教師の著書を通じて知っていたとも言われているが、影響を受けたとは言えない。（中国では、農家に限らず法家・儒家も基本は農本主義である。）
  - テュルゴー Turgot 仏 1727-81 ……ケネーの弟子。ケネーと同じく『百科全書』に執筆。ルイ16世の財務総監に任命されたが、1776年、特権身分の反対で失脚。
- 3) 産業革命期には古典派経済学が成立した。資本主義研究の古典という意味で古典派という。重商主義に反対し、経済活動への国家の干渉を排除し、自由競争にまかせる自由主義経済学。
  - 【21:                   】 Adam Smith 英 1723-90                    【19】を受け継ぐ著書『【22:                   】』で、自由主義経済学を完成させた。自由放任にすれば「神の見えざる手」で調和に至る。
  - リカード Ricardo 英 1772-1823                    労働価値説に立つ                    著『経済学および課税の原理』
  - マルサス Malthus 英 1766-1834                    著『人口論』

## 持続的な人口増加

それは18世紀以降……つまり近世末から近代以降のことである！

- 1) 人口の増加はこんなぐあいだった：  
16世紀初め   ポルトガル   約140万、スペイン   約500万、イングランド   200万  
その後100年間で、ヨーロッパ全体で                    6700万 → 8900万 に増加した。  
1600年ごろ   オランダ   約150万、イングランド   約400万、フランス   約1500万、ドイツ   約1600万  
フランスがドイツを恐れるわけである。  
「好況の16世紀」には人口は増加し、「17世紀の危機」で、人口は停滞ないしは減少した。18世紀には再度増加傾向に転じ、持続的な人口増加の時代が始まり今日に至った。
- 2) 近世では、人口の8割は【23:                   】で生活していた。  
人々は身分制秩序の下に暮らし、王権は服装にいたるまで細かく規制し、浮浪者を取り締まった。  
大交易時代以降、砂糖、コーヒー、陶磁器、綿製品などが大量に輸入され、豊かな人々は、いわゆる消費社会を形成した。

## 西欧諸国における「生活革命」

- 1) タバコ・茶・砂糖・コーヒーなどは、ヨーロッパに紹介された当初は王室や貴族に独占されていたが、豊かになった市民層も日常生活に取り入れるようになり「生活革命」とも言うべき現象がおき、現代につながる生活文化が形成された。それまでは、大勢の人々が出入りするといったら、貴族のサロンに限られていたが、都市には人々が自由に交流できる場が形成されていった。
- 2) イギリスの都市生活の象徴は【24:                   】である。17世紀中頃に登場、酒を出さず、コーヒー、タバコを楽しむながら新聞、雑誌を読んだり、客同士で政治談議や世間話をした。世論形成の重要な空間となり、イギリス民主主義の基盤として機能したといわれるが女性が出入りすることはなかった。情報収集の場でもあり、ロイズ・コーヒーハウスには、船主たちが多く集まり、船舶保険業務を取り扱うようになり、ロイズ保険会社の起源となったというのはあまりにも有名。18世紀後半以降は衰退し、パブ（酒場）に取って代わられた。そしてコーヒーに代わってより安価な紅茶が市民生活に定着した。
- 3) フランスの都市生活の象徴は【25:                   】である。17世紀末パリに登場。カフェとはコーヒーのこと。酒も軽食も出す。パリには18世紀初頭に約300軒、フランス革命前には700軒ほどあったらしい。ルソー、ディドロといった思想家のほか革命家や政治家もカフェで議論し、フランス革命においてカフェが果たした役割は計り知れない。コーヒーハウスと異なり今も健在。同じものを注文してもテラス席は室内席より高い。ウェイターはギャルソンという。
- 4) 活版印刷術の進歩で、17世紀にはマス・メディアの元祖、【26:                   】も登場した。識字率の向上で18世紀には出版物は急増した。初期の新聞はA5判の紙に片面あるいは両面印刷され、コーヒー1杯とほぼ同額で、コーヒーハウスには各種新聞が揃えられ、客たちは回し読んだ。

《参考》19世紀であるが、明治時代初期の日本、自由民権運動の中心地の一つ神奈川県五日市町（現東京都あきる野市）には全国の新聞を手にとつて読める新聞縦覧所があった。